

編集後記

日本の人口減少にとまぬい、大学に入学する学生の数もどんどん減っています。当然のことながら大学には淘汰の圧力がかかるようになり、「ぼやぼやしていると潰れてしまう」という危機感が日増しに強まっています。こういった環境にあつて、産業や経済に直接寄与するこの少ない文学部という領域は、一番苦しい立場に立たされます。「生きているに精一杯な厳しい時代に哲学なんかひねくりまわして何になる」「昔のことを重箱の隅をつつくように調べることに何の意味がある」といった批判が、一般社会のみならず、教育界を司る組織運営者の中からも出ているといった話を聞きます。このような声に対して、私たち文学部の人間が堂々と反論するにはどうしたらよいかといえは、方法はひとつしかありません。文学部の研究というものが、どれほど人に喜びを与えてくれるものであるか、そしてそれが目先の利得とは別の次元で、世の有り様を理解することにとれば役立つものであるかを、実例をもつて示すことです。つまり一言で言うなら「人を感嘆させるような研究を生み出し続ける」ということです。それが最終的には回りまわつて、文学部の存在価値を世に認めさせることとなり、ひいては大学の存続にも寄与することとなるでしょう。

大学の研究紀要というものは、とかく地味で面白みのないものだと思われがちですが、それぞれの大学の、それぞれの学部の研究状態が世に提示される情報発信源だと考えれば、最も重要な広報手段であるといえます。大学の存在価値を示すバロメーターという言い方もできるでしょう。今回、文学部長として「文学部研究紀要」の編集代表を務めました。

あらためてその重要性を再確認しております。これからも花園大学文学部の素晴らしさを示す「動かぬ証拠」として、この「紀要」がますます充実したものとなっていくことを願っております。今回は編集作業に関して、本学の奥山研司教授にひとかたならぬお世話になりました。奥山先生には、心より感謝申し上げます。

(文学部長・佐々木閑)

花園大学文学部研究紀要 第四六号

二〇一四年三月一〇日 発行

非売品

編集兼
発行者 花園大学文学部

代表者 佐々木 閑

発行所 花園大学文学部

京都市中京区西ノ京霊の内町八一—
電話(〇七五) 八二—一五二八(代)